

自然発話における形容詞の使用状況

— 述部に表出する「いい」に注目して —

木 下 謙 朗

キーワード：形容詞，述部，条件形+いい，多様性，チャンク

1. はじめに

自然発話中に表出するイ形容詞は日本語学習者、日本語母語話者（以下JNS）を問わず、「いい」が修飾部と述部に共通して最も頻度が高いという報告がある（木下2007a）。「いい」はイ形容詞の中でも特別な活用形態を持っているにもかかわらず、多くの初級教科書の早い段階で導入され、また日本語能力試験出題基準でも4級レベルに設定されている。このように、日本語学習者にとって学習開始直後に学ぶ「いい」はどのように使用され、どのような誤用^①が表出しているのであろうか。また、JNSにおいても、どのような使用状況であるのか究明する必要があるだろう。

そこで、本論では日本語学習者とJNSの発話資料に表出したイ形容詞「いい」の使用状況について、調査分析を行う。

2. 先行研究と研究課題

小矢野（1985）では、名詞と形容詞との組み合わせの間にみられる格助詞について、ある決まった格助詞が見られると述べている。また、橋本（2007）では、ある名詞とそれを修飾する形容詞について、語と語の結びつきの強さを中心に調査している。しかし、形容詞はいつでも格助詞を介して使用されるものではないことは、実際の会話で明らかであろう。橋本（2007）は名詞から共起する形容詞についてアプローチをしているが、木下（2007a）で修飾部、述部に共通して「いい」の表出頻度が高いことが報告されていることから、本研究の課題を以下の2点とする。

課題① 日本語学習者とJNSの発話資料において、「いい」の使用状況はどのような差異があるのか

課題② 日本語学習者とJNSの発話資料における「条件形+いい」の使用状況、および「A+が+いい」の場合の「いい」と共起頻度の高い語句「A」は、日本語学習者とJNSで差

異が生じるのか

3. 調査資料と方法

日本語学習者の発話資料は、自然発話といわれている OPI⁽²⁾ テープを文字化した 90 人分の言語資料、KY コーパス⁽³⁾ を使用する。KY コーパスは英語、中国語、韓国語をそれぞれ母語とする日本語学習者（以下それぞれ ENS, CNS, KNS）合計 90 人に対して行った面接テストで、各言語 30 人（初級 5 人、中級 10 人、上級 10 人、超級 5 人）⁽⁴⁾ となっており、面接の総時間は約 2,250 分である。日本語教育において標準的能力判定の付いた唯一の会話データである KY コーパスを、日本語学習者の発話資料として使用する。一方、JNS の発話資料は、「インタビュー形式による日本語会話データベース（上村コーパス）」を使用する。このコーパスは OPI テスターが JNS に対して行った一人約 15 分のインタビューを文字化した、50 名分の文字化テキストである。被験者は JNS であるため、レベル分けはされていないが、学習者の場合と同じようにロールプレイも行われている。

これらの資料を使用し、

- ・修飾部と述部に表出した「いい」を全て抽出し、正用・誤用（形態的誤り）⁽⁵⁾ に分ける
- ・レベルの上昇に伴う「いい」の使用状況を概観し、母語による違いを明らかにする
- ・「条件形+いい」の使用状況を学習者と JNS を比較する
- ・「A+が+いい」ので示される「A」の頻度の高い語彙を明らかにする

このように考察を進める。

4. 結果と考察

4.1 課題①の結果

日本語学習者の総表出数は 550 例で、そのうち誤用は 12 例で、誤用率は 2.2% であった。次に日本語学習者と JNS の表出頻度の上位 5 語を挙げる（表 1、表 2）。

表 1 日本語学習者の表出頻度
上位 5 語（述部イ形）

語彙	表出数	割合
いい	550	29.6%
多い	129	7.0%
難しい	127	6.8%
おもしろい	87	4.7%
少ない	55	3.0%

出所：木下（2007a）に基づく

表 2 JNS の表出頻度上位 5 語
（述部イ形）

語彙	表出数	割合
いい	145	25.2%
多い	99	17.2%
おもしろい	51	8.9%
難しい	26	4.5%
よろしい	23	4.0%

出所：木下（2007a）に基づく

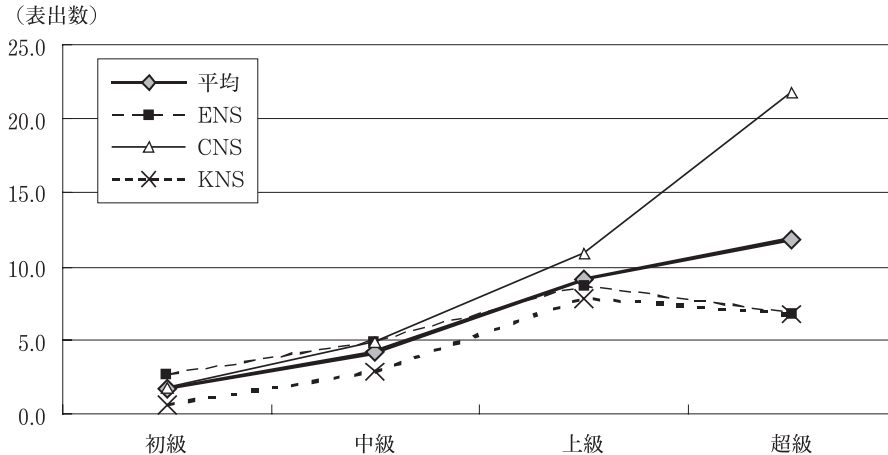


図1 レベル上昇に伴う「いい」の表出状況 (一人当たり)

レベルの上昇による、学習者一人当たりの表出状況の変化をみると (図1)、学習者全体 (平均) ではレベルの上昇に伴い「いい」の表出数も増加している。しかし、学習者の母語別にみると、CNSは超級レベルまで使用の増加がみられるが、ENSとKNSは上級レベルから超級レベルにかけて使用が減少している。木下 (2007a) では、述部におけるイ形容詞全体の表出状況は、それぞれの母語話者に共通して上級レベルから超級レベルにかけて減少していたという報告があったが、本研究では「いい」の使用についてCNSが増える傾向があることが特徴的であり、興味深い現象である。

次は「いい」の前に使われる助詞について観察する。以下の例はENSとCNSの表出例である。

- | | |
|-----------------------------|------------|
| (1) このぼらのスカーフは <u>いい</u> です | (ENS 中級下) |
| (2) 今の雰囲気 <u>が</u> いいんですよ | (CNS 上級上) |
| | (下線は筆者による) |

これらの例のように「いい」を使用する際、どのような助詞を「いい」の前に用いるのであろうか。学習者とJNSに共通して表出した助詞の表出状況を図2に示す。

図2から分かるように、学習者とJNSは「が」と「無助詞⁽⁶⁾」の使用が最も多くなっている点が共通している。また、使用されている助詞が多様化している点においても学習者とJNSで共通している。(3)は助詞「が」の例、(4)は「無助詞」の例である。

- | | |
|-------------------------------|-----------|
| (3) 私が、一番理想としてるのは今の雰囲気がいいんですよ | (CNS 上級上) |
| (4) きょうみたいないい、お天気だったら、ん、気持ちいい | (ENS 上級) |

以上の結果を踏まえ、学習者において表出頻度の高かった「が」と「無助詞」のレベルの上昇に

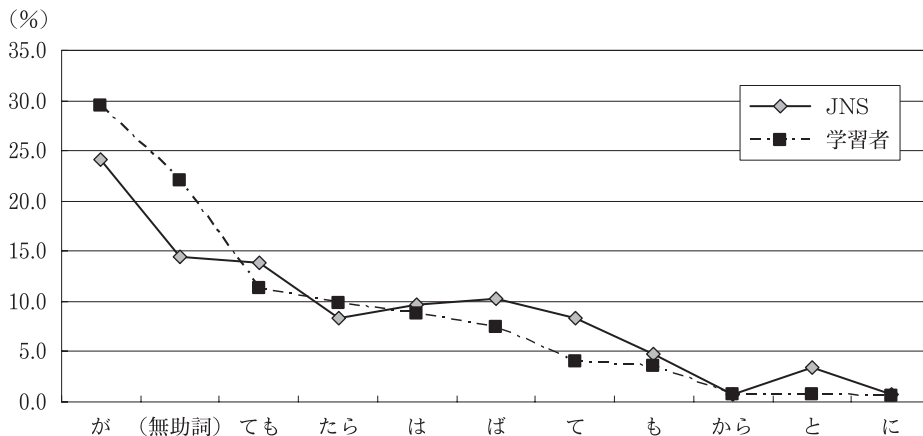


図2 「いい」が用いる助詞の使用状況（学習者とJNS）

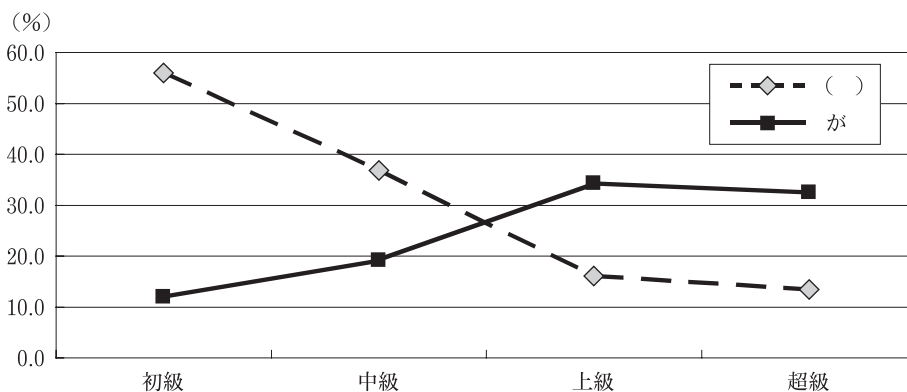


図3 レベルの上昇に伴う「無助詞+いい」と「が+いい」の使用変化（学習者）

よる使用状況がどのように変化するかを次の図3で示し説明する。

「が」は初級レベルで表出が少なかったが、レベルの上昇に伴い使用の増加が見られる。一方、「無助詞」は初級レベルで多く使用されているが、レベルの上昇とともに使用が減少している。「無助詞」と「が」は中級から上級レベルにかけて使用する割合が逆転し、超級レベルでは「無助詞」対「が」の割合は13.5%：32.5%となり、「無助詞」と「が」に負の強い相関がみられた ($\gamma = -0.98475$)。一方、JNSの「無助詞」対「が」の割合は14.5%：24.1%となり、学習者の上級レベルと同様に「が」の使用が多い。多くの初級日本語教科書で、入門期に「無助詞」について触れているものは少ないが、初級の段階で「無助詞」の比率が「が」よりも高くなっていることは、注目すべき現象であろう。

4.2 課題②の結果

4.2.1 「ほう+が+いい」

次に、超級レベルで最も表出頻度の高かった助詞「が」と「いい」が同時に表出したときの、

表3 「A+が+いい」における「A」について

	JNS	学習者
「ほう」の占める割合	51.4%	60.5%
「A」の多様性	0.428	0.247
「A」の頻度	2.333	4.05

「いい」と共起する語句を「A」（下記の例文では「京都駅の前」）とした場合、「A」にあたる語句の表出頻度の高い語句を学習者とJNSについて調査した。(5)は学習者の発話例である。

(5) 京都駅の前がいいかと思えますけど (KNS 上級)

調査の結果、発話中にみられる「A+が+いい」の「A」は、学習者とJNSに共通して「ほう」が最も多いことが分かった。学習者とJNSの発話中にみられた「A+が+いい」の「A」について示したものが表3である。また、学習者における「ほう+が+いい」の発話例が(6)である。

(6) 家族の為にも少し考えた方がいいんじゃないですか (CNS 超級)

表3に示したように、JNSの場合は「ほう」が「A+が+いい」に占める割合は51.4%であったが、学習者の場合は60.5%と高い割合となった。また、JNSの「A」は「ほう」以外にも、「効率、都合、プロット」など多様性⁽⁷⁾に富んでおり、「A」の多様性は【JNS>学習者】となる。頻度⁽⁸⁾に関しては【JNS<学習者】となり、「A+が+いい」の「A」は学習者の場合、多様性が低く、ある決まった語句を何度も使用する傾向が明らかとなった。それに対してJNSは、「A」の多様性が高く、その語句の表出頻度は学習者よりも低い。

4.2.2 「条件形+いい」

続いて、「条件形+いい」の使用状況についての観察を行う。「条件形」は「ても、たら、ば、と」の四つとする。条件形の表出状況を表4に示す。また、(7)~(10)は学習者における条件形の使用例である。

表4 条件形の表出状況 (JNS と学習者)

	JNS	学習者
ても	13.8%	11.3%
たら	8.3%	9.8%
ば	10.3%	7.5%
と	3.4%	0.7%

- (7) なんでもいいですから困ったときには (KNS 上級上)
 (8) どうしたらいいか、わかりません、 (CNS 中級上)
 (9) んーおもしろいことなら、どこいけばいいかな (ENS 上級上)
 (10) うん、うまく行けると、いいんですけどね (ENS 上級上)

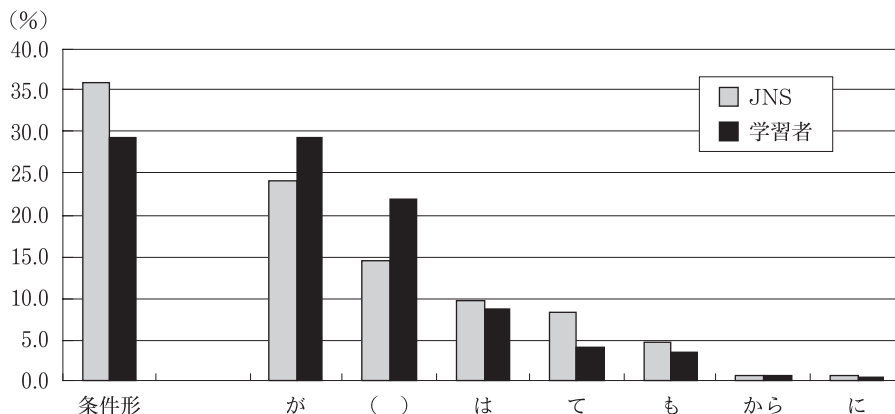


図4 「いい」が用いる助詞の使用状況・条件形 (学習者とJNS)

四つの条件形 (ても、たら、ば、と) の合計をみると、学習者は「が」と同じくらいの使用状況であったが、JNS では使用頻度が最も高かった。条件形の内訳をみても (表4)、学習者よりもJNS の使用率が高いことがわかる。

ただ一つ JNS よりも多く使用がみられる条件形「たら」は、CNS の使用が多くなっている (ENS : 11 例, CNS : 28 例, KNS : 15 例)。(11)は CNS における「たら」の使用例である。

- (11) とうふ、入れて、切ったら、うん、切ったらいいです (CNS 中級中)

このように、学習者の母語により使用する形態が異なるということも明らかになったが、それは学習者の母語の影響なのか、学習環境によるものなのかなど様々な要因が考えられるが、本論の研究課題とは異なるため別稿に譲る。

5. おわりに

以上、述部に表出する「いい」の使用状況について、日本語学習者と JNS を中心に比較してきた。学習者のレベルの変化による、「いい」の使用状況は ENS と KNS は上級から超級レベルで、減少をしていたが、CNS のみ使用の増加がみられた。

「いい」の前に用いられる助詞は、日本語学習者と JNS は非常によく似た使用状況をしていた。学習者におけるレベルの上昇による使用状況の変化を観察した際、JNS に近づいていく傾向があることが明らかとなった。学習者は「が」と「無助詞」がレベルの上昇に伴って、使用頻度が変化

していった。助詞を習得していない段階では、助詞を付けずに形容詞「いい」を使用するが、「～がいい」という使用法を学習後、助詞を使用していくのではないかと推察できる。しかし、この点について、更なる研究が必要であるため、今後の課題とする。

「A+が+いい」の使用状況は学習者と JNS に共通して「～ほうがいい」の使用頻度が高かった。「A」の多様性は【JNS>学習者】、頻度は【JNS<学習者】となり、「条件形+いい」の使用頻度は【JNS>学習者】となった。学習者は条件形を多用するというよりは、「～ほうがいい」をかたまり（チャンク）として覚えているため、「～たほうがいい」、「～るほうがいい」などの使用が多くなるのではないだろうか。また、「条件形+いい」は文型としてまとまったものと捉えきれないために、使用が少なくなっていると考えられることでもできるだろう。しかし、本研究の使用データは横断的なものであるため、今後縦断的な資料を用いて、多角的に分析をすることで、形容詞「いい」の使用状況を一般化できるように研究を進めていきたい。

〈注〉

- (1) 学習者の表出する「不完全」な言語は一般的に「誤用」とみなされるが、中間言語の考え方では学習者自身が作りあげた独自の文法体系に基づいて「文法的に正しく」産出されたものということになり、「誤用」という考え方に疑問がある（迫田 1998）。筆者も学習者の産出した「不完全」な言語を「誤用」とすることに疑問を感じているが、本稿では一般的に「正用」とされているものと区別をやすくするために、「誤用」という用語を使用する。
- (2) OPI (Oral Proficiency Interview) とは、「最長 30 分という限られた時間内の面接で、できるかぎり信頼性のある自然発話を必要最大限採集し、それを ACTFL (全米外国語教育協会) 外国語能力基準に照らし合わせて被験者の口頭能力を測定する評価法である」（鎌田他 1998）。
- (3) 「KY コーパス」とは、平成 8 年～10 年度文部省科学研究費補助金・基盤研究「第二言語としての日本語の習得に関する総合研究」（研究代表者カッケンブッシュ寛子：課題番号 08308019）のメンバーである鎌田修と山内博之の頭文字を合わせて KY と命名されたことからきている。
- (4) その中でも初級、中級、上級はさらに上・中・下と分けられており、全体で 10 段階にレベル分けされている。
- (5) 形態的誤りとは活用語尾に関する誤用であり、誤りは基本的に語尾の部分に起きる。これに対して語彙的誤りがあり、語彙自身の習得が不完全なところから生じる誤用であり、誤りの起きる範囲が語尾だけでなく語幹など語彙全体に及んでいる。
- (6) 無助詞については、ゼロ格なのか助詞の省略なのかということが問題になってくる。筆者は本来助詞があるべきであっても省略できるような場面、文脈だと考えている。
- (7) ここでいう多様性とは延べ語数における異なり語数の割合のことで、値が高ければ高いほど多様性が高いことを示している。
- (8) ここでいう頻度とは異なり語数における延べ語数の割合のことで、値が高ければ高いほどその語彙使用が多いことを示している。

参考文献

- 鎌田修 (2006) 「KY コーパスと日本語教育研究」『日本語教育』130 号, 日本語教育学会
 家村伸子 (2001) 「中国語話者における日本語の否定形の習得研究 — 過去とテンスとの関わりを中心に —」『日本語教育』110 号, 日本語教育学会
 木下謙朗 (2007a) 「自然談話における形容詞の使用状況 — 日本語学習者と母語話者の発話資料を中心に

- に —」明海大学修士論文
- (2007b) 「日本語学習者の日本語力はどこまで母語話者に近づくか — 形容詞の活用形態と「～的」の使用について —」『日本語教育学会秋季大会予稿集』125-130, 日本語教育学会
- (2007c) 「日本語学習者のイ形容詞の使用実態 — 母語別習得モデルに向けて —」『第18回第二言語習得研究会全国大会予稿集』73-78, 第二言語習得研究会 (JASLA)
- 小林ミナ (2005a) 「コミュニケーションにおける文法項目の評価」『第21回日本語教師のための公開研修講座予稿集』11-17
- (2005b) 「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』23-42, くろしお出版
- 小矢野哲夫 (1985) 「形容詞のとる格」『日本語学』vol. 4, 3月号, 21-38, 明治書院
- 小山悟 (1997) 「文法性判断テストは何を見ているか」『九州大学留学生センター紀要』9号, 39-50, 九州大学
- 坂本正・小山悟 (1997) 「日本語学習者の文法修正能力」(共著)『第二言語としての日本語の習得研究』1号, 第二言語習得研究会
- 迫田久美子 (1999) 「第二言語学習者による「の」の付加に関する誤用」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』科学研究費補助金研究成果報告書, 327-334
- 曹紅荃・仁科喜久子 (2006a) 「中国人学習者の産出した共起表現から見る語彙習得の問題 — 作文対訳データベースの活用 —」第56回第二言語習得研究会配布資料
- (2006b) 「中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言 — 名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について —」『日本語教育』130号, 70-79
- 野田尚史 (2001) 「第3章 学習者独自の文法の背景」『日本語学習者の文法習得』45-62, 大修館書店
- 橋本和佳 (2007) 「名詞とそれを修飾する形容詞の関係」『日本語学』vol. 26, 10月号, 明治書院
- 水谷信子 (1985a) 「誤用分析(1)-(6)」『日本語学』vol. 3, 4月号-9月号, 明治書院
- (1985b) 『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版